
天使憑き

夢籐真琴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使憑き

【Nコード】

N6437Z

【作者名】

夢籐真琴

【あらすじ】

男に天使が憑いた

序章で殺されてしまった彼

その彼を視る眼は！？

天使が憑いた彼が目にするものとは！？

天使と紅い服の者の正体とは！？

天使憑きの彼の世界が今始まる

序章

彼がその異変に気づいたのは
高校からの帰り道であつた

何かが変だつた

いつもの帰り道

いつもの自宅への登り坂

「な・・・!？」

音が聴こえない

匂いがしない

視界ははつきりしない

いや見ているものがまるでテレビを通して
見ているような感覚

そして手足は自分の思いとは反対に

止まらない

歩き続ける

右から車が

急ブレーキをかけられる

しかし車は急に止まらない

体は宙を浮いて壁にぶつけられた
痛みを感じない

車から男の人が降りてくる

何か言っている

しかし聴こえない

口を見ていると

「だ・い・じ・よ・う・ぶ・か」

大丈夫か？

いいや、大丈夫ではない

身体からは大量の血が

「ああ、死ぬのか 意外に早かったなあ」

意識が遠くなる

自分が悪いのにこの人に迷惑をかけてしまったな
薄れていく意識の中

相手のことを考えている自分がおかしかった

毎日疲れてた

一眠りするか

彼は自分が死ぬのに未練を感じなかった

そして眼をとじた

野次馬が集まっているところを
遠くから見つめている者がいた

それは閑静な住宅街とは遠く離れた

学校の屋上だった

フェンス越しに見ていたが

やがて興味をなくしたのか

紅い服をひるがえして

校舎の中に帰っていった

天使との出会い？

彼は目が覚めた
寝かされていた

助かったのか・・・？

そう思いながら天井を見上げてみると
病院にしては天井が高かった

ここは何処だ？

そう考えながら

まず上半身をしていてみた

体が動く

その事を確認するとなんだか嬉しかった

体が自由ということはいいいことだとしみじみ思った

彼は立つて周りを見渡してみた

そこは驚くことにいわゆる

神殿

と呼ばれる場所だとわかった

神々しい感じがした

「やっぱり死んだのか」

そう思い見惚れていると

「うお！？」

後ろに女の子が立っていた

同級生ぐらいだろうか

顔立ちは整っており

一般には可愛いと言われるであろう

これが天使だろうか

そう考えた途端

「おめでと〜」

いきなり少女（天使？）が声をかけてきた

「君は千万人の一の確率に抽選であたりました〜」

妙に嬉しそうな声でいきなり言われたので

頭がついてもいかなかった

「何に？」

ごくごく普通な

そしてまともな

当然の疑問を天使にぶつけてみた

天使との出会い？

その疑問に彼女は絶望的な答えを返してきた

「君、宮西零君みやにしれいを生き返らすことにしたよ」

ここまではまだまともだった

生き返らすことは絶望的ではない

問題はこのあとの彼女の言葉だ

「私が零君を殺したんだ」

・・・聞き間違えか？

この子が僕を殺したのか

「だからって悲観しないでね、私がもう一度現世にしていってあげるから」

殴り倒してもいいだろうか？

温厚な性格だと自負しているけど

そこまで勝手に殺されたくない

ついでに殺されてすぐに生き返りたくもない

「じゃあ一緒に現世に戻ろ」

ちよつと待て

手を挙げてみる

「はい、宮西零君」

こいつは教師か

「君は誰？ここは何処？現世に戻るってどうやって」

我ながら簡潔に3つに絞って質問できた

その答えは

「え」と一つ目からいくね

私はドロシア ドロシーって呼んでね

2つ目はここはいわゆる天の国ね

3つ目は魔法で帰るわ」

なるほど って納得できるか

「ああ、忘れてた 零」

いきなり呼び捨てですか・・・

「眼と鼻と耳 どれがいい？」

「じゃあ眼で」

何となく答えてしまった

「さすが零君 見込んだだけのことはあるわ」
意味を問おうとした途端

何かに吸い込まれていった

病院にて？

目が覚めた

ここは何処だ？

ベットの上？病院か？

夢を見ていたのだろうか？

それにしてもはつきりしていた夢だった

隣には生命維持装置だろうか？それらしき物が置いてあった

体は動かさそうなので立ってみる

意外にも痛さを感じない

後遺症というものもないらしい

ありがたいことだと感じながら

ゆっくりと歩いてみた

大丈夫そうだ

ふと後ろに気配を感じて振り返る

するとそこには

あの天使がいた

「元氣そうだね」

お前が殺したんだろ

ていうか夢じゃなかったのか

再びの絶望感

「顔がこわばってるよ」

女だからって手加減しなくてもいいよな

そもそもこいつ天使だし

「どう？再び下界に戻ってきた感想は？

下界じゃなくて現世か 君達には」

「夢じゃなかったのか・・・」

無駄とわかっていても言ってしまった

「あまり時間がないから要点だけ言つよ

君、宮西零は28時間前に交通事故にあって意識がない重体になっている

ここで君が目を覚ました

多少めんどくさいけど精密検査がある
それが終わって退院したらまた来るよ」

二度と来るな・・・

殴りかかるうとしたとたん
後ろの扉が開いた

「まあ目が覚めたの!？」

じつとしてないと駄目よ

今先生呼びますね」

年配のベテランらしい看護師が声をかけてきた

そしてもう一言

「あら、窓が開いてるじゃない

あなたが開けたの？

ここは10階なのだから落ちたらあぶないから開けては駄目よ」

・・・言葉がない

天使なら魔法で帰れよ

そうつぶやいた彼には絶望感しかなかった

病院にて？

天使が帰ってから零は忙しかった

別に精密検査はいい

医者の仕事だしやるしかないだろう

親もきて色々言われたがしょうがない

自分が悪い

自業自得だ

いや、そもそもあの天使が僕を殺したのならあいつが悪い

また一つ彼女を殴る理由ができた

しかしまだここまでは良かった

ここからが問題だった

医者と警察から事情聴取をやらされた

ここまではまだ許せる

しかしこのあと聞かれたことは

「君はなぜ自殺をしようとしたのだい？」

驚愕的だった

その言葉はあの忌々しい天使並みに

零を絶望の底に落とした

病室で窓を開けていたのと

フラフラと歩いていたのを

僕が自殺をするのではないかと疑っていたのだ

カウンセラーの人も来たし

カウンセリングもさせられた

ベットに10日間も座らせられて

常に誰かの監視があった

これにはさすがに閉口した

ふと学校のことを思い出してみた

そっぴや結構学校に行っていないな

と思った瞬間

「・・・もう、夏休みか」

宿題はどうするんだ

悶々と自問自答していた

それを見た監視の人が医者を呼んで来て

またカウンセリングを受ける羽目になった

「もうどうにでもなれ」

開き直った零だった

白銀の眼

零が解放されたのは夏休みが半分ほど過ぎた頃だった

とうとう警察も医者も零の態度をみて

諦めたようだった

カウンセリングも零が自暴自棄になったので

変な結果になっているだろう

零が解放されて家に帰って自分の部屋に入ると眼の前に忌々しい天

使が椅子に座っていた

「おかえりーお疲れ様」

零は天使に向かって飛びかかった

もちろん手はグーで

「ちよつと、なにをするのよ　女の子に攻撃するなんて」

「てめえは天使だろ」

問答無用で殴りかかると

いや、かかろうとすると

天使が消えた

「無駄よ　あなたが私を攻撃することはできないわ」

眼の前にまた天使が立っていた

するとあきれたように

「もしかしてあなた気づいてないの？」

「何を？」

諦められず隙あれば攻撃しようとしたまま問いかける

「あなた鏡見ないの？見なさいよ」

何かいやな予感がした

急いで机の上にあった鏡で顔を見てみると

「うお！？」

眼が白銀というのだろうか

光沢のある何色にも染まらないような
綺麗な銀色になっていた

「もしかして・・・」

身に覚えなら山ほどある

天界から帰る時に天使に聞かれた言葉

「眼か鼻か耳かどれがいい？」

あれが原因か・・・

げんなりとしていると

「あなた本当に気づかなかったの？」

前に会ったとき真夜中で電気がついていなかったのに顔見

えたでしょ？

それはあなたの白銀の眼のおかげよ

ちなみにそれも私のおかげだから感謝してよね」

折角さつきまで抑えてきた殺気が再び燃える

「何をしたー！ー天使」

再び殴りかかった

天使の事情？

零の不意打ちによっていい勝負が出来た

――40分後――

人間の域を超えた体力を持つ零が体力がなくなり諦めたとき

「あなた、人間じゃないわね」

「大体お前も天使だろうが」

「あなたねえ いい加減私を名前で呼びなさい

よ 私はドロシア、ドロシーでいいって言うてるでしょう？なんで

天使なの？」

「忘れてた」

ドロシーは肩を落とした

天使といえど疲れを感じるようだ

「聞きたいことがあるけどいいか？」

零は疑問に思っていたことを聞いた

「なんで俺を殺したんだ？」

ここから始まる天使の解説に零も肩を落とした

「天界にはたまに下界（現世）に必要な時があるのよ

そこであなた達みたいな人間離れしている

オバケに用を頼むのよ

もちろんただ働きではないわよ 報酬はでるわ

でもいくら人間離れしたオバケでもできることとできないことがあるわ

そこであなた達には

白銀

の称号を与えるのよ

白銀の称号を与えられるとその部分あなたの場合は眼 そこが天使

との同調するようになる

同調するとあなたの最大限の力が発揮できるようになるわ

あなた達を補佐する役割及び天界からの伝言を伝えるのが私たち天使なのよ

わかった？」

天使の事情？

「理由はわかった 具体的な天界からの要件はどんなのなんだ？」

「そうね、基本的にあまり難しいのはないわよ 安心してね」

いやお前に殺された時点で安心とかいえないと思うが・・・

「もう一つ、白銀の眼はどういうことができるんだ？」

「そうね、例えば壁の向こう側の人間の行動がわかるとか、遠くのものが見えるとか、危険時のみれけどものがゆっくり動いているように見えるとか あくまでも危険時のみだけだね 後は物に毒が入っているとか その物の材質がなになのかとか」

「なるほど結構高性能なんだな ちなみに同調を詳しくおしえてくれ」

「あなた、こんなこと聞いても驚かないのね 神経がないんじゃない？」

「お前に殺されて生き帰った時点で神経もへったくれもない」

「にべもない言い方ねえ 同調はね、あなたが危険になった時に私にわかるとか あと下界では携帯っていうの？」

あれと同じように通信ができるわよ

あなたの見ている世界は私にもわかる

文字通りあなたと私をつなぐのよ」

「おまえさつき難しくないって言ったよな？」

さつきから

—————危険—————

っていう単語連発してないか？」

「そ、そんなことはないわよ」

こいつ一瞬焦ったな

天使の事情？

「おまえ、今ごまかしたな」

「何のこと？」

「もう一発殴ろうか？」

「わかった言うよ言います」

「それでいい」

「あんたすごい偉そうね」

「時と場合による」

ため息をついたドロシーは説明し始めた

「確かに基本的には危険はないわよ

でもね前にあったことなんだけど

通り魔事件があつたのよ

それで理由は言えないけど天界のお偉い方が

その犯人を捕まえるように白銀の称号を持つている人オバケに頼んだのよ
でもその犯人がとても強くて

本来私たちに白銀の称号をもらう域の人だったから苦戦したわけ

結局、その人の相棒の天使がきて助かったのよ これでよろ

しいでしょうか？ 零様？」

「ああ、下がって良いぞ」

「御意」

いつのまにか王と臣下の対談になっていた

「それで、俺はどうやって暮らすんだ？」

「今まで通りでいいわよ あなたたちは特に日頃はすることはな
いわ

だからいつも通り学校に行つて

帰つて来るだけでいいわ」

特にすることがないわけか

それなら滅多に呼び出されることもなさそうだ

「しょうがない、選ばれたんだから付き合ってやるよ」
ドロシーはホッとした顔で爆弾を投げつけた
「これから私はここに住むわね」

天使と同居！？

零は妹との二人ぐらしだ

別に両親は他界したとかではなくちゃんと生きている

前に入院した時もちゃんと見舞いにきた

しかし父が外国中を飛び回っているの

それに付き添う形で母も一緒に飛び回って

結果妹との二人ぐらしになっている

父は典型的な仕事人間で

減多　ていうか2年はあっていない

だがそのおかげで妹と二人で生きていけるだけのお金を貰っている
それを知っていた天使は同居しようと言い出したらしい

「何でよくいいじゃない同居ぐらい　こっちだって泊まるとお金が
いるんだよ

部屋も多いし広いし問題なしでしょ」

「妹がいるだろうが」

「妹さんには見つからないようにするから」

「お前は信用できん」

「やだゝなにそれ　仮にも私たちは同調できる相棒なのよ　仲良く
しましょうよ」

「気持ち悪い言い方するな」

「こんな美人を捕まえていてあなたは何を言ってるのよ？」

「自分で言っな」

「でも美人でしょ？」

「う・・・」

確かに美人だろう

顔立ちは整っている

しかしこいつは天使だ

人を殺しておいて同居しようなんてよくそんな口がたたける

一階から上がってくる妹が見えた
もちろんドアは閉じている

白銀の眼を使つて見ているのだ

「おい、天使隠れる」

天使は妹が来たのをわかっているのにもかかわらず隠れようとしな

「天使！」

声をあげたが動く気配がない

「私はドロシーよ」

な――

「兄貴、入るよ」

天使と同居！？

渚（俺の妹）が部屋に入ってきて見たのは
当然のように俺と綺麗な天使だった

しかしこの妹はとんでも無いことを聞いてきた

「兄貴、その銀の眼どうしたの？」

「な——」

なぜこの眼が見えるんだ

一般人は見えないはずだ

ドロシーに問い詰める

「おい、天使　なんでこいつが俺の眼が見えるんだよ？一般人
は見えないはずじゃないのかよ？」

するとここでも最近恒例になって、だいぶ慣れてきたはずの問題発
言をしてきた

「いや、彼女は一般人じゃないし」

「はあ？」

「だから彼女はこっち側の人間オバケ

かわいそうなことに零の影響が知らないけど彼女は私たちと組める
だけの實力を持っている

ただの守られるだけの子猫ちゃんじゃないのよ」

顎が落ちそうだった

いやはずれた

「だからね、彼女は珍しいのだけど

あなたたちみたいなおバケを助ける役割があるのよ

白銀の称号を持つてはいないのだけど

少なくとも相当強いはずよ

あなたは・・・剣を使えるわね？」

これに答えたのは予想外の展開にもついてきている渚だった

「私は渚です

はい剣道をやっています

綺麗な天使さん？」

「ドロシア、ドロシーでいいわよ

零の妹だけあってさすがにすごい神経してるわね

普通の人はこんな時驚いてめんどくさいのに

さすがこの兄にしてこの妹ね」

「私は普通の人間ではない力はあることを知っていました
だから剣道をしました

兄貴に天使さんがついても

特に驚きません」

「ねえ 突然話変わるけどこの家に同居させてもらえないかしら
？渚」

「いいですよ、ドロシーさんみたいな綺麗な人・・・じゃない天使
さんは大歓迎です

兄貴女性に感心示しませんから」

女二人（天使一人か？）で盛り上がっている

ドロシーは嫣然と笑いながら

「わかったわ 任せなさい」

零は匙を投げた

天井どころではなく

宇宙に届くまでの勢いで投げつけた

天使と同居！？

結局、2人の説得（強引な）に負けて

ドロシーは同居することになった

2階は現在僕と妹が使っていたが

まだまだ部屋が余っていたので

その部屋の一つを提供する事になった

僕は押入れか物置にでも

放り込んでやろうかと思っていたのだが

渚の猛反対と

天使の女性をそんな所に放り込んでおくなんて（だからお前は天使だろ）と主張し

2階の隅の部屋がドロシーの部屋になった

この際だからお前は女性なのかと聞いてみると

「もちろん、この体をみて女性に見えないなら眼科と神経科に放り込むわよ」

「なんでそこに神経科が出てくるんだよ・・・」

案の定厳しい返事が

「あなたの神経がくるってるからに決まってるじゃない」

「お前、さっきの事に根に持ってるな・・・」

「あたりまえでしょ」

私は神聖な天使よ

その神聖な天使を物置に放り込むなんて

ひどい・・・」

泣く真似をし始めた

そこにどこから出てきたのか渚が

「兄貴、サイテー

女性を泣かせるなんてサイテーよ」

最近はすっかりこいつまで天使の味方になって

こっちを二人がかりで攻撃してくる

天使一体と人間オバケに

一般人である自分かなうわけもなく・・・

いや、今更自分を一般人呼ばわりするつもりはないが

勝てるはずがない

天使と同居？

天使と同居してはや一週間がたつ

幸い学校もまだ始まっていないので

家でのおんびりとすることができた

これは事故（天使が殺した）のよって宿題がほとんどないからだ
初めて天使に感謝できることが見つかった

それにしても、天使と同居したのに

特に変わることがない

我ながら、環境適応能力が発達しておると思う

僕は無神論者だが（すでに天使に会った時点で神様はいるんだなあ
）と思ったが）神様にこれまた初めて感謝をした

その理由は妹に僕の血は流れていないことだ

初めは同居を進めていたのに、いざ始まるとなると気になって仕方がないようだ

それはそれとして
閑話休題

僕が天使と会って劇的に変わったのは

もちろん、白銀の眼だ

しかし、この眼ははじめは厄介な代物だった

なにしろ入ってくる情報量が半端じゃない

何かを見るだけでその材質、質量などが一発でわかるからだ

ちなみに眼は両眼とも白銀の色をしているが

情報が入ってくるのは、右眼だけだ

両眼に入ってきたら、どうしようも無い

ついでに視野も広がったようだ

ようだ、ではなくて確実に広くなった

極端な話360°見えるようになった

しかし慣れてくると面白いもので

周りにぶつかる危険性がない

それに結構面白い

天使曰く、

「あなたほど早く白銀の称号を慣れて

オバケ

いつのまにか遊んでいるような人はいないはずよ」
と呆れていた

天使の実態

天使が好きで嫌いなものは一体何だろうか？

これはもちろん天使に仕返しするためだ

退院して家に帰るより先に

そのために町外れにある図書館に行ってみた

町には大きな図書館がもちろんある

しかしなぜわざわざ町外れにある

図書館に行った訳は

そこはおそらく個人経営でお婆ちゃんが一人だけでやっていたのだ
そのお婆ちゃんが魔女のように見えたからだ

天使もいるのだから、魔女もいるだろうと

強引な考え方をして

失礼を百も承知で体を透視

スキャン

させてもらったが一般人だった

そのお婆ちゃんとは結構親しかったので
安心をした

ところで、天使が好きなものはわかった

ある日の夜

天使が居間に降りてきた

それを白銀の眼アイ

感じ取った僕は

渚を置いたまま隣の部屋に避難する

それをみた渚も人間離れした脚力で同じように逃げた（渚は白銀の
眼を知っている）

しかし間一髪のところでは天使は渚を見つけた

「あら、渚ちゃん どこいくのかなあ？」

猫なで声というのだろうか？

物凄いいかい声で背中に鳥肌が立つような声だった

「あ、ああ、ドロシーさん こっちには兄貴もいますよ」
密告しやがった

いやこの場合密告ではないが

「てめえ兄を売りやがったな」

「だつて」

「じゃあ2人でしようよ」

前にもまして甘い声

体が震える

渚も同じく・・・

天使が盛んに（半強引的に）誘っているのは
市販のテレビゲームだった

数日前に話を戻す

「ねえ これ何なの？」

「テレビゲーム 天界にはゲームはないのか？」

「へえーゲームする機械なの

天界にはないわね

人間もたまにはいいのを作るのね」

テレビゲームに興味を示したので

渚が使い方教えると

すぐくはまってしまったのだ

徹夜で付き合わされたこともある

話を現代に戻す

戦慄した僕ら兄妹にゲーム機を渡して
早速始めてしまった

「俺は宿題があるから」

「あなた、宿題ないでしょ」

「う・・・」

「私は片付けがありますので・・・」

「あら、何のこと？」

キッチンを見てみると何時の間にか片付いている

魔法を使いやがった

「う・・・」

絶句した兄妹を横目で見ながら

「今日はなにしようか」

これまた可愛い声で言った

家にはなかったはずのゲームが積み上げられている

魔法で取り寄せたゲームを物色しだした

「誰か天使が嫌いな物を教えてくれ」

非日常の始まり

天使に無理矢理ゲームに付き合わされた夏休みは終わり新学期が始まった

僕& a m p ;渚はゲームから開放される喜び半分と新学期が始まる憂鬱感があつた

夏休みあけ特有のダラダラ感もあつた

そんなある日、

数学の授業中に通信が入った

もちろん相手は麗しき（面倒な）天使だ

通信は頭で考えたことが相手に伝わる

初めは慣れなかったが最近は色々と便利に使っている

「零、至急屋上へきて」

もちろん声は周りには聞こえない

時計を見してみる

あと30分は授業だ

「この時間が終わってからでいいか？」

ところが無情にも天使は

「あなた、至急の意味がわからないの？早くきて」

声が珍しく切羽詰まっていたので

「わかった、今からそっちに向かう」

「急いでね」

「ほいよ」

さて、返事をしたのはいいが

この状態をどうやって脱出するのか

ちよつと考えてから

「先生、ちよつと用事思い出したので出てきます」

教師と同級生がポカンとしているところを

そのまま有無を言わず廊下に向かいダッシュで階段を駆け上がった

声に緊迫感があつた

それと共に零は不吉な予感をしていた

第六感というのだろうか

こつという感覚を無視するとうるくなことがない

一応屋上を眼を使つて見てみるが特に以上は感じられない

一気に駆け上がりドアの前に立つた

そして、ドアを開けてみると

そこには、3人がいた

同級生くらいの男と

ドロシーは可愛い顔だが

その天使は（おそらく）、端正な顔立ちをしていた

もちろんもう一人はドロシーだ

白銀の眼には映らなかつた人が（天使？）いた

その様子を山の頂上から見ていた者がいた

決して近くはないその山の頂上で

静かに学校を見ていた

紅い眼を光らせて・・・

非日常の始まり（後書き）

新シリーズ突入

紅い人がついに出てきました

あとコメント、感想お待ちしております

それと天使の苦手な物も教えてください

小説に乗るかもしれませんが

是非コメント寄せてください

非日常の始まり？

天使に呼ばれて屋上にきた零が見たのは
スキャン
透視で映らないはずのない

2人の姿だった

いやよく見てみると耳が銀色にひかっている

白銀の称号だ

「なるほど・・・」

口の中が乾いている

絞り出すような声が出た

男の方は真面目そうな人間だ

天使の方は冷たそうにさえ感じられる

「零です、よろしく」

少しだけだが2人の表情が変わったような気がした

「よろしく中森秋人だ」
なかもりあきひと

ちなみに君より一つ年上だ」

「よろしくサミだ」

素っ気なく言われた

いやそんな気がしてたけど

「あなた、相変わらず強心臓なのか

鈍感なのか

慌てないで自分から名乗り出るなんて」

とドロシー

「だから、お前に殺された時点で常識は捨てたよ」

「ひどいわね」

「どっちがだ、人のことをオバケだ　鈍感だ言ってるくせに」

「事実でしょ」

「さすがだ・・・」

サミが俺たちの喧嘩になりそうな空気に入ってきた

高貴な声というのか

これが神様だといわれたならば
何も疑いを抱かなそうだ

「ドロシーが手を焼いているというからどのような人間かと思って
いたが

さすがだな

零か

名を覚えておこう」

秋人さんも

「面白いやつだな

楽しめそうだ」

物騒な笑いをしながら言った

一応一般人を自負している（天使に対しては言葉が荒いが）零はた
め息をついた

どうやら彼以外ともな人間ではなさそうだ

零は気づいていないが彼自身も他からみると相当変わっているが・

・

どうやら自分は彼らと協力をしないとイケないらしい

早くも人生を悟った零であった

暗闇の中で紅い眼を光らせて

楽しげに笑っていた

「面白いやつだ」

日常との別れ（前書き）

今回はちょっと長めです
少し間隔があいてしまいました
すみません——

日常との別れ

二人に協力することが決定事項になってしまった零はげんなりと肩をおとしていた

それに構わず固いイメージを持っていた秋人とドロシーが仲良くしゃべっていた

「それにしても、こいつなかなかの器持っているな」

「サミも認めたからね」

「あのサミが認めるのは滅多にない・・・いや見たことないもんな」
「確かにね」

そこに乱入してきたサミが

「秋人は最初なにも言えなかったからな」

「いやいやサミさん、まずあの状況でまともな状態でいられませんよ」

なぜ敬語？

「零は割とまともだったよね

軽口たたいてたし」

いや、よく覚えていないが

「そうなの　お前やるねえ

後輩なのに若干尊敬

これから俺に対しては敬語いらないよ」

「ありがとうございます」

意外に軽い人なのか？

そんなことよりも聞かなくてはいけないことがあった

「ちなみに俺って何で呼ばれたの？」

「紹介するためだけだ」

「お前もしかしてそれだけとか言わないよな

ドロシーちゃん？」

満面の笑顔で問いかける

秋人、ドロシー、サミでさえ顔がこわばっている

「そのために授業を抜け出さなければいけないかったわけではないよな
ドロシー……」

今度は若干声が低くなる

秋人は後ろに下がりつつある

ドロシーは顔が蒼くなっている

「ドロシーーーーーー!」

大声で叫び攻撃にでる

ドロシーも承知のうえで先に逃げている

この学校は勉強に力をいれており

授業を大切にしている

授業を抜け出すなんて言語道断だ

補習の嵐が待っている

無論プリントの嵐もだ

こんなくだらないことで呼び出されたのかという怒りが零を動かしていた

驚異的な跳躍力でドロシーに迫り

柔軟性を武器に人間の体ではあり得ない攻撃を繰り出す

それをみたサミは

「ドロシーがオバケと言った理由がわかるな

身体能力が半端ではない

いくら我々天使達と同調したところで

あの無茶な動きはできない

あいつは本当の人間じゃないかもしれないな」

「いやいや、そこはさらっと流したらいけないところでしょう

サミさん」

零がドロシーを抑えつけようとしている

「これだけ見てれば美男子と美女

楽しい画なのになえ サミさん」

「お前私に何を期待している?」

「何でもないです

そういや何で魔法使わないんだろ？

魔法を使ったら零はかなわないはずでしょ？」

その疑問には零も耳を傾けた

「それは無理

天使と同調した人は天使の魔法にはかからない」

「かかるって・・・媚薬みたいじゃん

じゃあ攻撃の仕方は？」

「無論殴り合い」

「原始的な方法ですね

ちなみに天使は疲れたり、傷ついたりするんですか？」

「一応するが人間程体力消費は早くない」

「なるほど」

2人和やか（？）に話しているのを聞き

「いい事聞いちゃったなあ〜ドロシーさん？」

秋人もサミも零の周りの気温が下がった気がした

いつのまにか零はドロシーに馬乗り状態になっている

「ちょ、零　　女の子を殴ってはダメよ

サミさんも余計なことを言っていないで助けてくださいよ〜」

「お前は女か！」

「そうよ、私はか弱い女の子よ！」

「か弱いは取り消せ！」

秋人& a m p ; サミは内心　　そこか　　と突っ込んでいた

「あなた一回眼科行きなさいって言ってるでしょ

それと押し倒すのは他の女の子にしなさい」

「お前以外にやったら犯罪者じゃねえか

眼科も行った

この白銀の眼でも問題なしだよ」

「それなら神経外科は？」

馬乗りの体勢で猛烈な口喧嘩をしているところに口を挟んできたの

は秋人だった

「お二人さん

仲がいいのはいいんですが

そろそろ今の状況を考えてくださいよ」

零とドロシーに睨まれて逃げ腰になった秋人だが逃げなかった

今の二人に睨まれて逃げなかったのは

表彰ものだ

顔を引きつらせながらも

「今授業中ですよ

周りの迷惑を考えてくださいよ」

「忘れてた」

秋人は妙なところでハモった2人をみて

苦笑をしていた

そして白銀の耳を使って教師が上がってきたのを探知した秋人を先頭に各自校舎を逃げ回った4人であった

番外編〜逃走中〜秋人& a m p・サミの場合

秋人が聞こえた通りちょうど屋上から降りたところに教師たちがきた幸い顔は逆を向いていたので見られてなかったが追いかけてきたので当然のように逃げた

秋人の場合

「何で俺まで逃げなきゃいけないんだよ」

「あなたが原因でしょうが」

あんな大声出して」

「元はといえばお前だろ」

こいつら逃げてる最中まで喧嘩してやがる

俺はもちろんこの学校の生徒ではないので制服が微妙に違う

一応学生の中だから目立ちにくいだろうと思いき制服をきてきた

ちなみに授業中に忍び込んだので生徒や教師には見つからなかった

「お二人さん、今は逃走中ですよ

いいかげん喧嘩はやめなさい」

とは言ったもののこの2人は見ていておもしろい

今まで見たことのない2人だ

大物だろうな

結構俺は真面目にとられることが多いが

面白いことが好きだ

特にこんなふうに校舎で鬼ごっこも嫌いではない

「ここから別れて逃げよう」

階段と廊下が多数あるところで

零の言った通り分散して逃げる
それぞれが別れて逃げた

とりあえず階段を降りたが

降りた瞬間に横から教師が出てきた

内心うんざりしながら逃げる

しかし行くところ行くところに出てくる

なにしてるんだ

ここの学校の教師は授業中に

そん

なに暇なのか

そんな悪態をつきつつ一階に急ぐ

しかしよく考えてみれば授業中でも他の学校の生徒が乱入したら捕
まえに行くのは普通か

そんなどうでもいいことを考えながら逃げる、逃げる、逃げる

校舎の中の地図はさっきサミさんに通信してもらったからわかるが

それにしても、この学校は迷路か

広すぎるだろ

予想外の広さに戸惑いはあるが

とにかく逃げ切らなくてはいけない

一階についた途端窓を開けて外に飛び出る

この学校はフェンスも高いのでそこをよじ登るわけもいらない

残る手段としては校門から堂々と出ることだが・・・

それは流石にまずいよな

と思いつつ脱出の方法を考える

幸い今は追われてないので校舎裏に隠れて

相棒に連絡をつける

通信で自分の連絡先を伝えておく

「サミさん、どうしますかね？」

サミの場合

階段を上にかかる

「なんで私がこんなことを」

呟きながら追ってから逃げる

こんな茶番劇に付き合う気はさらさらないが

衆人環視の中で魔法を使うわけにはいかない

最悪の場合記憶をいじればいいのだが

それは魔法ではいけないことのトップであり

タブーでもある

それに人の記憶をいじるのは気持ちのいいものではない

人の記憶とはいってもものもある嫌なものもある

記憶をいじるのはその中に入って作業をしなくてはいけない

そんな気持ちの悪いものをしたくない

というのがサミの本音である

基本そうだろうが・・・

それはともかく逃げるところに人が出てくる

そろそろ面倒臭くなってきたところ

「サミさん、校舎裏で待機中、指示頼む」

どうやら自分の相棒は逃げ切れたようだ

それなら自分も行動のうつる

「邪魔する奴を排除するぞ」

「了解、校門で集合ね」

こんな曖昧な表現でも察してくれる相棒に

密かに笑う

いい相棒に出会えたと思う

そして後ろからくる者を角を利用して足で蹴り飛ばす

端正な顔立ちで無表情のまま人の顔を蹴り飛ばす天使も大変画になる

目の保養に最適だ

しかしそんなこともお構いなしで一気に階段を駆け降りて
校門にいる相棒の元へ向かう
どうやら全員片付けたらしい
口から泡を吹いている

「サミさん、終わったよ〜」

飄々といとも簡単そうに言う
顔を晒さずに5人も倒すのは楽ではないだろうに
零も面白いが秋人も面白いと
密かに思った

顔には出さなかったが

「上等だ」

「そういえばあいつら大丈夫ですかね〜？」

「元々あの2人が原因だ
自業自得だ」

「相変わらず冷たいね〜」

冷たい・・・か

「帰るぞ」

「待ってくださいよ〜」

その声を聞き流し学校を出た

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6437z/>

天使憑き

2012年1月5日19時46分発行